視点

子供に困難を乗り越える喜びを

「スポーツの秋」真っ盛りである。

先ごろ文部科学省が「体力・運動能力調査」の結果を発表した。この調査は、東京オリンピックが開催された1964年度に始まった。調査開始から50年の節目を迎えた今年は、長期の分析を行っている。

それによると、小中学生の体力・運動能力の水準は、1985年度を頂点に低下している。近年の15年ほどは回復傾向にあるものの、運動能力の高低の二極化が進んでいるという。運動を得意とする子の運動能力が高くなる一方、運動を極端に苦手とする子も少なくないのである。

なぜ85年度前後がピークになっているのか。調査担当者によると「そのころまでは、本人のためにと思って厳しく指導することが、保護者には受け入れてもらえないことも大きな要因だろう。体罰的指導は決して許されないが、緩やかな指導ゆえに『心身を鍛える』機会が少なくなっている。

たとえ運動が苦手であっても『なんとか歯を食いしばってでも頑張れ』と、精神的なサポートをしながら指導をしていたが、少しずつ『そこまでしなくてもいいのでは』『しんどければやらなくてもいい』になっていった」と分析している。

運動会であれば「騎馬戦」や「組体操」といった、かつては当たり前に行われていた競技や表現運動が減りつつあるという。

万全の態勢で細心の注意を払っていても、時には事故につながることがある。しかし、そうしたリスクを避けて無難な競技・運動に終始すると、児童・生徒は達成感が得られない。練習を重ね、仲間と助け合いながら困難を乗り越える中で、大きな喜びを味わうのである。

先の文科省調査の過去のデータを見ると、東京オリンピックの後で体力・運動能力の水準が急に高くなったり、一時的に低下したりしていた水準が、長野冬季オリンピックの前後には回復している。

「オリンピックの開催は、日本人全体に体力向上の面で大きなメリットをもたらす」という文科省の担当者のコメントは興味深い。

国を挙げて、とはいかないまでも、自治体や学校現場では、旦二ろから運動への関心を高めてもらうための対策を講じている。たとえば大阪府箕面市では、外で遊ぶ機会が減っている子供たちに「縄跳び」を奨励している。市内の全小学生を対象に「両足跳び」や「二重跳び」などを、2カ月間で何回できたかを競わせるのだ。参加した子供が達成回数をホームページに入力すると、自分のランキングが分かる仕組みになっているので、さらなる向上心につながるそうだ。

天理小学校では11月の1カ月間、学年別にコースを設けて走る機会をつくっている。もちろん個人差があるので、しっかりと考慮する。その集大成として、12月初旬に「持久走大会」を実施している。他者との競争であると同時に、自己鍛錬の場にもなっている。自分の限界にどれだけチャレンジできたかを確かめるのである。

千葉県のある中学校校長は「最近の子供は、『何がなんでも頑張る』ということが少なくなっている」と述べている。また、東京で体操教室を開いている方は「以前に比べて『諦めの早い子』が多くなった」と嘆いている。

こうしたことは、子供たちだけに限らない。つらいことに、どのような状況でも、大人が前向きに努力することで、身近にいる子供たちにもその姿が映るのではないか。教祖130年祭に向けて、さらに心していきたいものである。（後）

視点

人だすけは幸福につながる

「こんなときに幸せを感じますか？」と聞かれたら、何と答えますか？

自分の望みが叶ったとき、たとえば志望校に入学、あるいは無事に卒業できたとき、また結婚・出産したとき、家族や大切な人と過ごしているとき、スポーツなどの趣味を楽しんでいるとき、おいしい食事をしているときなど、いろいろあると思う。

しかし一方で、病気や事情など、思いがけない出来事に悩み苦しむこともある。人生には、さまざまなことが起こる。そんなとき、幸せとは一体何だろうかと考えることもあるだろう。

中島みゆきの『糸』という曲がある。「なぜ めぐり逢うのかを 私たちは 何も知らない……逢うべき糸に出逢えることを 人は 仕合わせと呼びます」。めぐり逢いに始まり、仕合わせで括る素晴らしい詞である。

「幸せ」は、かつて「仕合わせ」と書かれていた。動詞の「する」が変化した「し」に「合わす」が結びついた「しあわす」が元になっている。「巡り合わせ」「運命」という意味である。

この「仕合わせ」は「仕合わせが良い」「仕合わせが悪い」、つまり、起きたことや出会ったことに対して、良い意味でも悪い意味でも、どちらにも使っていた言葉であった。それがいつしか、起きたことや巡り合わせたことの中から「良いこと」だけを「仕合わせ→幸せ」と言うようになった。

人生、良いことばかりではない。人生に起きるアイナスの面だけに焦点を合わせると、つらく悲しく、嫌になったりする。しかし実は、その裏には、大きな喜びが隠されている。それに気づくことによって仕合わせな出来事を、仕合わせが良い、つまり幸せだと受けとめることができる。

今年1月、NHK「幸福放放送局」という番組が放映された。この番組の企画意図は、「幸福」の正体を科学的に解明しようというものであった。

この番組で筆者が最も心に残ったのは「幸せには何が必要なのか。その3要素は人との交わり、親切心、ここにいること」と述べていたことであった。

「人との交わり」とは社会との結びつきが強い、つまり友人や家族と良好な人間関係があることである。「親切心」があると、人に親切する、あるいは人を助けようとすることで、これも幸福感の増進につながる。ボランティア活動に取り組むと幸福感が高まり、また幸せな人はボランティアに協力的だといわれる。そして、「ここにいること」とは、目の前のことに集中する意味だという。

この番組を見て「人だすけたらわがみたすかる」というお歌が心に響いた。まさに、3要素はお道の教えに通ずるものである。

「おふでさき」に「しやハせをよきようにてしやんすれバ　みについてくるこれをたのしめ　（二号42）とお教えいただく。

このお歌は「世界中の人々が皆、仕合わせが良いようにつまり幸せになるようにと、親神は心をお配りくだされる。親神様の恩召に沿う者、教えを信じて通る者、確かな道を通って通る者は皆、わが身に幸せを付けることができる。それを楽しみに暮らすように」という意味だと解釈できる。

私たちお道の信仰者は、親神様に心を「合わせる」ことで、幸福な生活を送ることができる。教祖130年祭活動も、いよいよ後半に入る。信仰のありがたさを感じ、陽気ぐらしの生き方を心がけ、おたすけを実行することによって、全教にたすけの渦を巻き起こしたい。

教祖から教えていただく、たすけ一条の道こそ、幸せへの道しるべである。（木）